

中沢遺跡発掘調査現地説明会資料

令和6年(2024)9月7日(土)



遺跡名： 中沢遺跡
所在地： 滋賀県栗東市中沢三丁目 263 番 1 の一部、264 番、267 番、269 番、269 番 1、270 番 2、271 番 3 の一部、276 番 2
時代： 弥生時代中期、弥生時代後期、鎌倉時代、近世以降
調査面積： 約 4 3 5 m²
調査期間： 令和6年7月1日から継続中(現地調査)
調査原因： 分譲宅地建設
調査主体： 公益財団法人栗東市スポーツ協会・文化財調査課
調査監理： 栗東市教育委員会・スポーツ文化振興課
調査担当： 近藤 広、柳澤慎之介

調査の概要

(1) 遺構

弥生時代中期～後期

掘立柱建物、平地式建物、溝、土坑、ピット、河川(T1～T7)

鎌倉時代

掘立柱建物、区画溝(T1)

近世以降

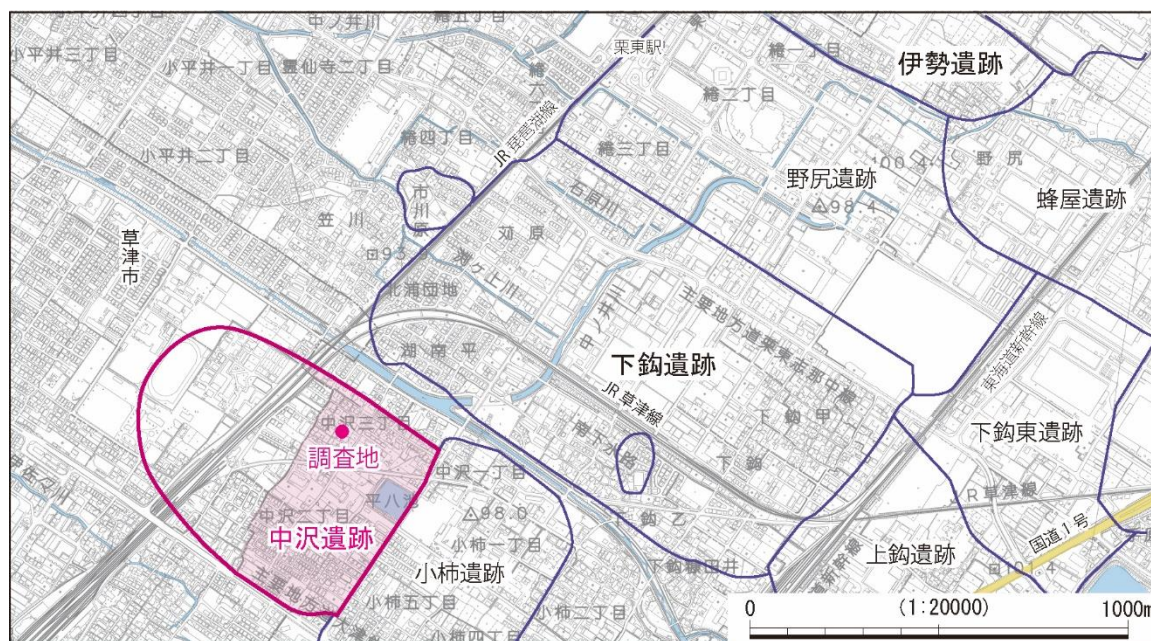
区画溝、井戸(T2～T4)

(2) 遺物

弥生時代…弥生土器、石器(石剣、石鏃、砥石)

鎌倉時代…土師器、黒色土器、瓦器、フイゴの羽口、鉄滓

近世以降…陶磁器、国産陶器



調査地位位置図

① 弥生時代の掘立柱建物 S B 1 について

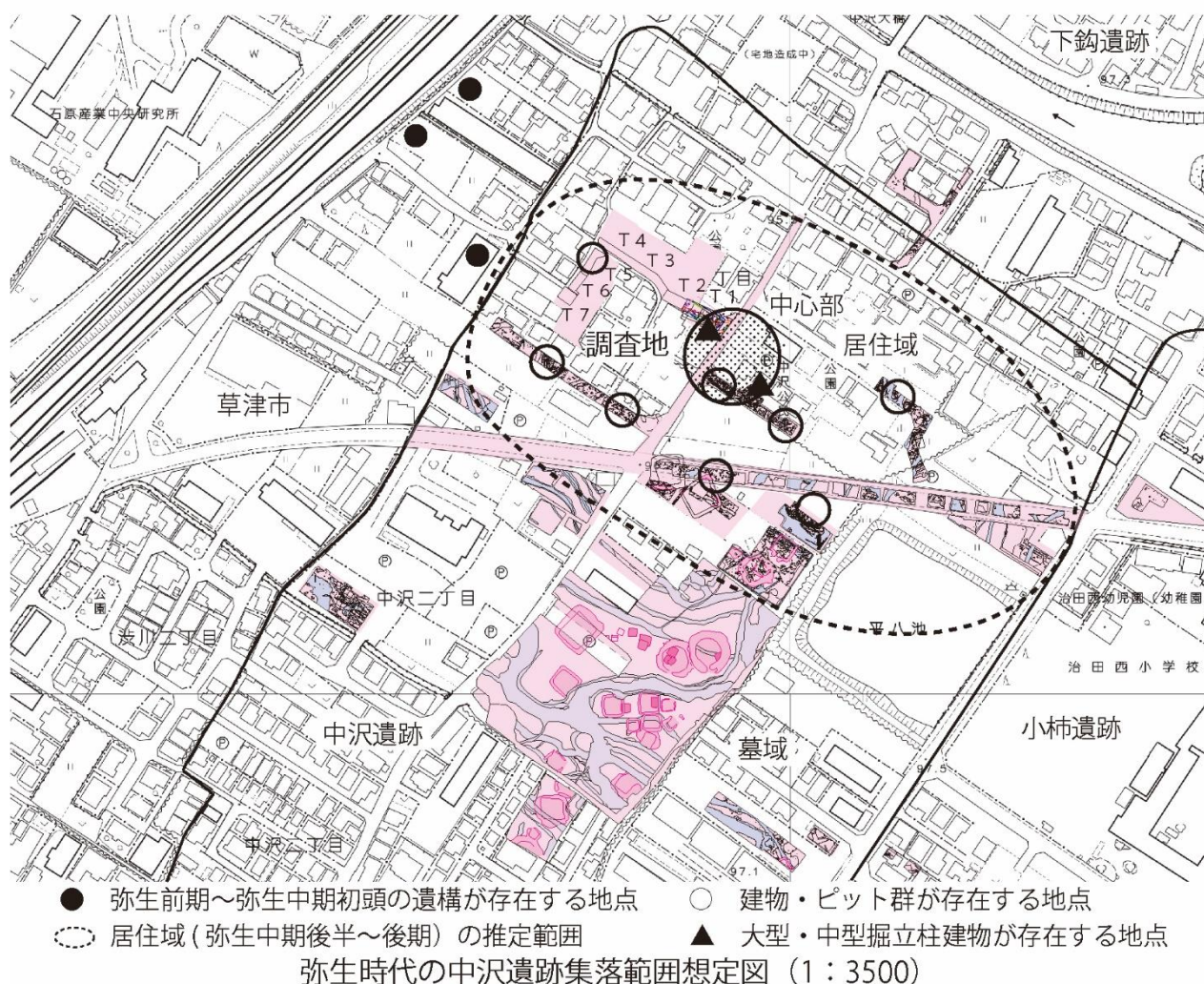
今回確認された弥生時代の掘立柱建物 S B 1 は、桁行 4 間 8.9m×梁行 1 間 4m、面積 35.6 m²で、40 m²以上を対象とする大型建物ほどではありませんが 35 m²を越える比較的大きな建物です。柱の掘方は長径約 80 cm、柱の痕跡は径約 25～30 cm 前後、深さ約 30～40 cm を測ります。時期は出土した土器の検討から後期前半と推定され、この時期の掘立柱建物としては近江最大である。2014 年度調査で見つかった中期後半とされる大型掘立柱建物(桁行 3 間 8.5m×梁行 3 間 6 m の面積 51 m²)と併せて集落の中心部付近にあることから一般的な居住用の建物ではなく、集会場や倉庫など共同で管理する建物であったと推定されます。中心部の約 50m の範囲が弥生時代を通じて集落の特殊区域であった可能性が想定されます。

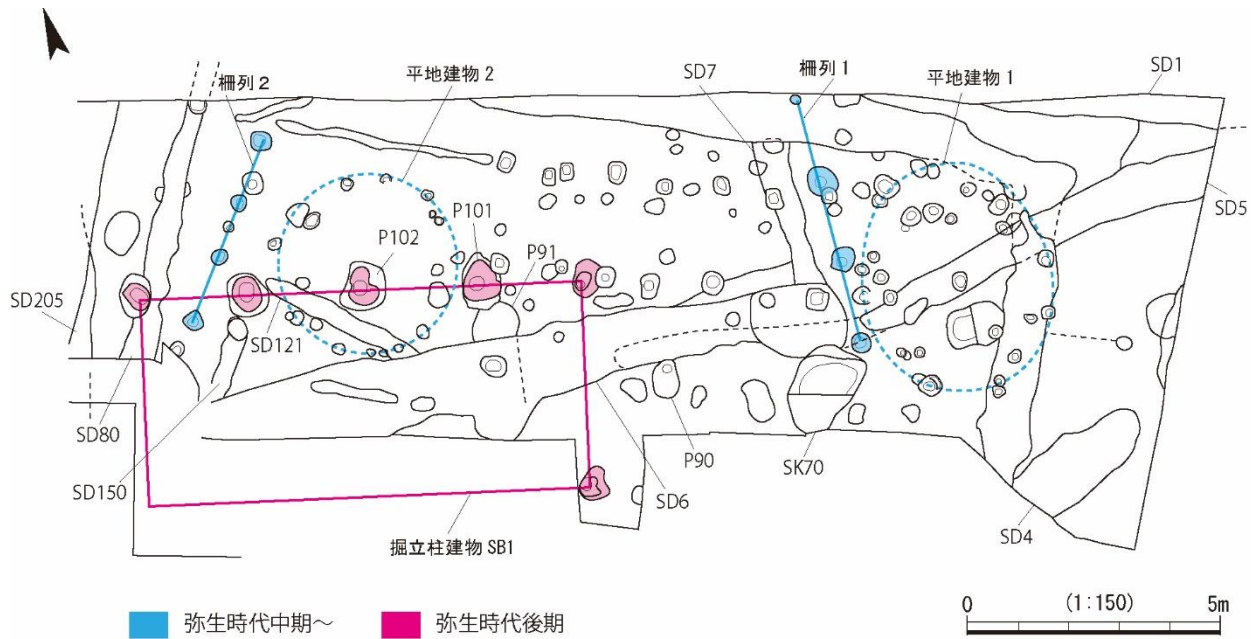
① 弥生時代中期後半の遺構について

今回の調査で中心となる遺構の時期が弥生時代中期後半の中葉で、平地建物、溝、柵列、土坑などがあります。遺構の密度が高く、重複関係や遺構の配置関係(方位など)の検討からおおむね 3 時期に細分される可能性が考えられます。

集落の規模は、推定東西約 350m、南北約 200m で、近江栗太郡の弥生中期後半の前葉から中葉の集落としては最大規模で、下鈎遺跡に集落の中心が移動する前の拠点集落と推定されます。

集落の中心時期は国指定史跡である守山市下之郷遺跡とおおむね同時期であり、共通点もいくつか見られます。どちらの遺跡も中期後半という短い期間に遺構が密集していて、重複が著しく建物の建て替えが盛んに行われています。竪穴建物は見られず、掘立柱建物と平地式建物で構成されています。しかし、中沢では後期前半に再び集落が拡大して中心集落になっていること、多重の環濠ではなく 1 時期に 1～2 条の溝により集落を囲んでいた点が大きく異なります。





遺構変遷図

まとめ

今回確認された掘立柱建物 S B 1 は、弥生時代後期では近畿地方で最古級の中型掘立柱建物で、後期前葉としては近江最大の規模をもちます。

掘立柱建物の構造が、下之郷遺跡でみられる弥生時代中期後半の大型建物と共通していて、後期中葉以降に流行する守山市伊勢遺跡に代表される伊勢型と呼ばれている掘立柱建物とは違い、中期的要素を残した最終末といえる段階の掘立柱建物です。



1. 掘立柱建物 SB1(白線部分)



2. 弥生時代中期後半の壺、甕



3. SB1 出土高坏(弥生時代後期前葉)



4. 弥生時代の石器(石鏃、石剣、砥石)



5. 鎌倉時代の碗、皿、フイゴの羽口、鉄滓